

〈長寿ファミリー企業研究センター〉

「長寿ファミリー企業の革新とコミュニティの関係についての地域間の比較」

## 京の老舗旅館「柊家」と川端康成

辻 田 素 子\*

国内外の観光客で賑わう京都には、柊家、俵屋、炭屋という三大老舗旅館がある。いずれも京都の中心部である田の字地区<sup>1)</sup>にあり、南北に走る麩屋町通に面している。各旅館はいずれも京都の伝統文化を実体験できる貴重な空間でありながら、少なからぬ違いが認められる。

最も古いのは俵屋で、石見国浜田（現島根県浜田市）の呉服問屋、俵屋和助が、京都に拠点を構えた宝永年間（1704～11）が創業とされる。2代目が、故郷から上京してきた人々を泊めるようになり、次第に宿が本業になった<sup>2)</sup>。海外からの顧客が多いのは、アメリカ人の母と日本人の父をもつ写真家、アーネスト・サトウ氏（1927-1990）<sup>3)</sup>の影響が大きいとされる。11代当主、佐藤年（とし）氏の夫であり、現当主、佐藤守弘氏の父である。アップル社の創業者であるスティーブ・ジョブズ（1955-2011）、20世紀のクラシック音楽界でカラヤンと人気を二分した指揮者のレナード・バーンスタイン（1918-1990）、世界的ロックスターのデヴィッド・ボウイ（1947-2016）らが定宿とし、ダスティ・ホフマンやトム・クルーズといったハリウッド俳優も訪れている。

「茶の湯の宿」として知られるのは炭屋である。創業は大正5（1916）年頃で、多趣味の当主が、京都を訪れた茶や能、謡の仲間を泊めているうちに旅館が本業となった。玄関口には、吉井勇（1886-1960）の歌碑、「京に来て うれしとおも

ふ しつかなる 利休このみの 宿のひと夜を」があり、毎月7日と17日の夜には、茶室で釜を懸け、宿泊客をもてなしている。

そして、柊家は、俵屋よりも約100年後、炭屋よりも約100年前の1818（文政元）年に創業した。若狭国向笠（福井県南部）出身の初代・西村庄五郎が、現在の地（麩屋町姉小路上ル）に居を構え、運送業、海産物商を始めたのが起源である。旅館業は、京へ来る同郷人から請われるままに宿を提供したことによる。俵屋と宿泊業を始める経緯は類似しているが、柊家は多くの文人墨客に愛された。その筆頭に挙げられるのが、ノーベル文学賞を受賞した川端康成（1899-1972）である。

本稿では、この柊家の歴史を整理したうえで、川端康成と柊家、そして京都との関係を紐解いてみたい。川端はいつ京都に立ち寄り、柊家に滞在したのか。川端はなぜ同旅館に惹かれたのか。川端にとっての柊家とは何だったのか。こうした疑問について検討する。

### 柊家はいつその地位を確立したのか

江戸時代から京都は、参詣、観光、商売といったさまざまな目的の旅人を迎え入れていた。そうした状況下で編まれたのが、多種多様な京都案内書である。柊家の創業年である1818（文政元）年以降に刊行された案内書を駆使して、その歴史を整理しておこう。

最初に、1831（天保2）年版および1851（嘉永

\* 龍谷大学経済学部 教授

4) 年版の『京都買物独案内』で、その存在を確認したい。同書は、各店舗から掲載料を募り、取り扱い品ごとに、いろは順で並べて刊行したと考えられている。江戸時代に出された書物ではあるが、『新撰京都叢書第7巻』(新撰京都叢書刊行会編、臨川書店、1984年)に収載されているため、アクセスは比較的容易である。

1818年の創業から10年余りが過ぎた1831年の天保版『京都買物独案内』、そこに柊家の名はない。だが、さらに20年を経た1851年の嘉永版では、「宿 寄宿」の欄に、その名が認められる。宿の大半を占める「諸国定宿」の欄に、「美かた、平木や正助(※正は崩し字)」の名があり、現住所の麩屋町姉小路上ルも明記されている。「諸国定宿」の計86軒にはそれぞれ「大坂」「江戸」「佐渡」「越後」「丹後」といった地名が書かれており、当該地域の商人らを中心に止宿させていたとみられる。

「美かた」は、福井県の若狭地方を指す。また、「柊家」の由来は、下鴨神社の境内にある比良木神社で、邪気を祓う柊の木が自生するこの神社に先祖が帰依した。「平木や」は、神社の「比良木」に由来したものであろう。「ひいらぎや」の文字はないが、「美かた、平木や正助」は柊家を指していると推察される。

柊家が旅館業を専業にしたのは、1861(文久元)年である。推察が正しいとすれば、嘉永版『京都買物独案内』によって、少なくともその10年前には正式な宿として認知されていたことになる。

上洛する武士が相次いだ幕末にも、手軽な買物案内記に対するニーズは高かった。1864(文久4)年の『都商職街風聞』には314業種、1155軒が紹介され、旅館は、「宿舎」「寄宿」「参詣宿」などに分類されて掲載されている。残念ながら柊家の名前は見当たらないが、「寄宿」に、俵屋の名がある。

1878(明治11年)に出版された『売買ひとり案内』でも、「宿」は、「寄宿」「商人宿」「旅宿」に分かれ、それぞれ26軒、9軒、21軒が紹介されている。柊家(「西村勝之助」)は、俵屋(「岡崎和助」)とともに、「寄宿」の項に記載されている。

1883(明治16)年の『都の魁』でもやはり、柊家(「ひらき屋」「西村庄五郎」「麩屋町通姉小路上ル町」と記載)は俵屋(「たわらや」「岡崎和助」「麩屋町御池下ル町」と記載)とともに「寄宿」として扱われている。

江戸時代、江戸・大坂・京都などの都市には、旅人の属性や目的によって、さまざまな形態の宿が存在した。寄宿とは、「公用や私用で上京する人が長期滞在する宿で、現代の下宿業に近い性格」だったようである<sup>4)</sup>。『売買ひとり案内』、『都の魁』とも、明治時代の書物であるが、江戸時代の宿泊業の特徴がなお残っていたのであろう。

しかし、1895(明治28)年発行の『京都土産』ではそうした分類が消滅する。「いろは別上等旅館」として182軒が紹介され、その中の一軒が「麩屋町姉小路北 柊屋」である。この名簿を眺めると、麩屋町通の立地が目立ち、柊家、俵屋を含め22軒を数える。

1895年は、遷都1100年を記念して、第4回内国勧業博覧会が京都・岡崎で開催され、京都に日本初の路面電車が誕生した年でもある。博覧会の入場者数は113万6695人に達し、路面電車などの電力は、琵琶湖疏水を利用した日本初の一般供給用水力発電によってまかなわれた。京都は、東京遷都によって衰退したが、官民挙げての産業振興によって、明治中期には近代都市へと大きく脱皮し、このころ、観光都市としてのインフラも整備された。

1903(明治36)年の『京都新繁昌記』を読むと、当時の京都の繁栄ぶりがうかがえる。同書は3篇からなり、第1篇では俳人の中川四明(1849-1917)が京都の名所を概説する。そこに、「諸方の宿屋及洋館<sup>ホテル</sup>」の説明があり、東海道の西に起点であった三条大橋・小橋付近と麩屋町通にある宿の賑わいが描写されている。

<sup>なかんづく</sup>就中麩屋町の通りには、紳士宿屋と謂はるゝ許り、家の構造、室の装飾、調度の諸品にも心を用ひ、客あしらひの懇ろなる、流石に京の寝心地好く、酒も肴も口に旨く、貴顕紳士は言ふも更なり、諸国の来客常に満ち、是れ亦新繁昌の一たるに負かず

「貴顕紳士」とは、身分が高く、教養や品位がある男子を意味する。華族の中でも特に位の高い公爵や政府の重鎮らであろう。そうした身分の高い人々が好んで泊まっていたことがうかがえる。

それを証明するのが、1928（昭和3）年に京都御所で行われた昭和天皇の即位式「昭和の大礼」であろう。柊家には、「京都市麩屋町姉小路上ル柊家 大禮 行幸ノ節 其の旅館ヲ供奉員宿舎ニ指定候事 昭和三年十月十一日 宮内庁」の文書（写真1）や、海軍少将（当時）・今村信次郎（1880-1969）ら宿泊者の写真が残る。

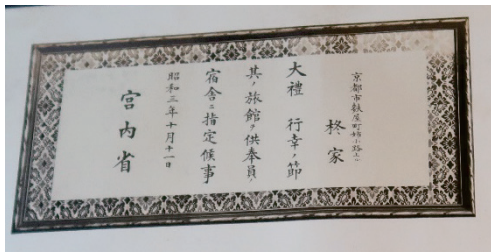


写真1 「昭和の大礼」で

柊家は少なくとも明治半ばまでに、名実ともに、京都を代表する旅館の一つとなっていたことがわかる。1905（明治38）年の『京都商工人名録』（営業税10円以上を納めている業者の名簿一覧）では、「旅宿」の納税者上位に、麩屋町の柊家（営業税39円、所得税43円）と俵屋（同41円、同21円）が顔をそろえている。

## 川端の原稿「柊家」には何が記されているのか

次に、柊家と川端康成との関係を明らかにしておきたい。柊家には数多くの著名人が宿泊しているが、川端ほど、ここを我が家のごとく感じた人はいなかったのではないだろうか。柊家のおもてなしの原点である「来者如歸」を心から実感していたに違いない。以下では、川端がいつ京都に立ち寄り、柊家に滞在したのか。また、なぜ同旅館に惹かれたのか。川端にとっての柊家とは何だったのかの順に考察する<sup>5)</sup>。

川端が柊家について書いた随筆は二つあり、一

つが「発表版」、もう一つが「未発表版」（写真2）である。いずれの自筆原稿も柊家が所蔵している。

京都ではいつも柊家に泊まって

あの柊の葉の模様の夜具にもなじみがある。京に着いた夜、染分けのやはらかい柊模様の掛蒲団に女中さんが白い清潔なおほいをかけるのを見ていると、なじみの宿に安心する。遠い旅の帰りに京へ立寄った時はなほさらである。柊の様子は夜具やゆかたばかりではなく、座蒲団、湯呑や飯茶碗などの瀬戸物にも、みだれ箱や屑入れなどにも、ついているのだが、その柊は目立たない。

この目立たないこと、変わらないことは、古い都の柊家のいいところだ。昔から格はあっても、もののしくはなかった。京都は昔から宿屋がよくて、旅客を親しく落ち着かせたものだが、それも変わりつつある。柊家の万事控目が珍しく思へるほどだ。

京のしぐれのころ、また梅雨どきにも、柊家に座って雨を見たり聞いたりしていると、なつかしい日本の静けさがある。私の家内なども柊家の清潔な檜の木目の湯船をよくなつかしがる。私は旅が好きだし、宿屋で書物をする慣はしだが、柊家ほど思い出の多い宿はない。

京の名所や古美術なども、この宿を根にして見歩いた。浦上玉堂の「凍雲飾雪図」を入手したのも、この宿でめぐりあってだ。政治家や財界人ばかりではなく、画家や学者や文学者にも、昔から親しまれた宿として、柊家は古都の一つの象徴であろう。私は京阪のほかの宿で泊まった後でも柊家へ落ちつきにゆき、中国九州の旅の行き帰りにも柊家に寄って休む。玄関に入ると「来者如歸」の額が目につくが、私にはさうである。

この文章は未発表版からの抜粋である。柊家のホームページやパンフレットで紹介されているので、目にすることがある人も少なくないはずだ。発表版は、1950（昭和25）年11月号の雑誌『洛趣』に掲載された。新潮社の『川端康成全集』第

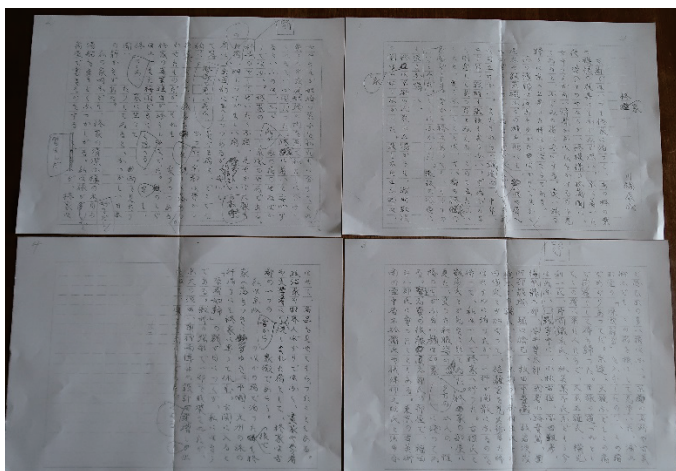


写真2 川端の原稿「柊家」のコピー（未発表版）

27巻に収められている。

### 川端はいつ柊家に泊まったのか

柊家の魅力を存分に綴った「未発表版」に対し、「発表版」は、川端が柊家に泊まった6回の体験を綴っている。まずは、「発表版」を通じて、川端が柊家に泊まっていた時期を確認しよう。

#### 初泊は1939年

川端が柊家に初めて泊まったのは、「家内の初めての上方旅行の時」である。「淀野君が世話をしてくれ、富の井のおかみさんがこの宿に案内してくれ、舞妓の久鶴や照子も加へて瓢亭へ行つたのなどを覚えてゐる」と記している。

「淀野君」とは、文芸評論家でフランス文学者の淀野隆三（1904-1967）である。京都府紀伊郡伏見町（現・京都市伏見区）の生まれで、京都府立京都第二中学校（現・京都府立鳥羽高等学校）、第三高等学校（現・京都大学）を卒業後、東京帝国大学文学部仏文科に入学し、梶井基次郎、中谷孝雄、外村茂の創刊した同人誌『青空』に参加した。川端は、梶井を通じて、淀野と知り合い、京都に行くと淀野の家に立ち寄り、淀野もまた鎌倉の川端家を訪問するなど、家族ぐるみの付き合いとなった。

「富の井」は、祇園白川にある「富乃井」とみ

られる。先々代が二年坂で料理旅館として店を構えたのが始まりで、1952（昭和27）年に今の祇園町に場所を移している。湯川秀樹、司馬遼太郎といった文化人に愛され、川端も泊まったことがあるらしい<sup>6)</sup>。

「発表版」に、柊家への初投宿の時期は明示されていないが、川端の生涯を追い、その広範囲な交流や文学的・社会的活動を網羅した『川端康成詳細年譜』（小谷野敦・深澤晴美編、勉誠出版、2016）によると、1939（昭和14）年5月初旬のことである。川端は39歳であった。

その3年後、川端は、小山書店が企画した桂離宮に関する本の取材で京都を訪れている。都ホテルに滞在後、柊家に移動した。

執筆予定の人々、小林古徑、安田靫彦、梅原龍三郎、安井曾太郎、武者小路實篤、堀田捨己（※堀口捨己の表記ミスと思われる）、田中豊藏、安倍能成、岩波茂雄などの諸氏が東京から行き、新村出氏と川田順氏とが京都から加はつた時は、都ホテルに泊まつたが、一行が解散になると私は一人で柊家に行つた。古徑さんと靫彦さんが先に来てゐた。私はお二人の部屋にちよつと顔を出して、柊家の夕方に見た、變つた和服姿の二人が性格のちがふ白い顔は印象に残つた。こんな風に私は京阪のほかの宿で泊つた後でも柊家へ落ちつきにゆく。ここが私の親しい京で

ある。

川端を含む3人が柊家に移動してきた話は、柊家の仲居・田口八重が書いた『おこしやす——京都の老舗旅館「柊家」で仲居六十年』（栄光出版社、2000年）にも記載がある。

この時、川端が柊家から妻・秀子に宛てた書簡をみると、「昨日燕を送り柊屋（ママ）へ移り候この前の竹の庭の部屋に候（中略）昨日午後淀野奥様子供三人づれにて見えられらしのおすし持参被下候 今日亦何か御持ち下さる由に候こちら宿晝飯出さぬが先日来御馳走攻めにて不自由無候」（1942年4月26日付）、「柊屋（ママ）ハ親切だ」（同4月27日付）などとあり、1942（昭和17）年4月下旬に柊家で快適に過ごしていたことがうかがえる。

戦後も川端は柊家を最良にした。「発表版」には、金沢での徳田秋聲文学碑建設記念式典の帰りに作家仲間の林芙美子と京都へ回り、淀野隆三の娘、華子と3人で柊家に泊まったことが述べられている。1947（昭和22）年11月中旬のことである。

金澤の歸りに芙美子さんと泊つた時、淀野隆三君の娘の華子ちゃんも遊びに来てゐて泊つた。華子ちゃんはお産近くだつた。寢床にはいつてから、私は「無常迅速、無常迅速」と幾度も言つた。芙美子さんは私を色氣がないと豫てから輕蔑してゐるが、私にしても芙美子さんと大きい腹の華子ちゃんと三人枕を並べては色氣がなく、また雪の降つてゐた金澤、小さい虹が幾つも立つてゐた北陸線、戦後の京都などにも、無常を感じたのだが、私が柊家に泊るたび、小學生のころから遊びに来つづけてゐた華子ちゃんが、今は結婚して出産しさうな姿であるのに、自分の年と世との移り變りもかへりみられて無常迅速を感じたのであつた。

川端はこの翌年、つまり、1948（昭和23）年の9月中旬、鎌倉文庫の大阪講演旅行の歸りにも柊家に宿泊している。同行者は、久米正雄、高見順、吉屋信子、林芙美子の4人である。ちなみに、鎌倉文庫は、神奈川県鎌倉市在住の文学者たちが戦

時中、自らの蔵書を集めて開いた貸本屋がスタートで、戦後、鎌倉に別宅を持っていた大同製紙社長・橋本作雄の支援を得て、文芸出版社に転じ、文芸雑誌『人間』や女性雑誌『婦人文庫』などを発行した。

「発表版」は、さらに2回、柊家での宿泊について言及している。

去年の暮と今年の春と、廣島長崎へ原子爆彈のあとを見に行つた歸りにも、柊家に寄つて長くなつた。

去年の暮は1949（昭和24）年12月、今年の春は1950（昭和25）年4月から5月にかけてを指す。同期間の川端の足取りを『川端康成詳細年譜』と、妻・秀子（のちに川端は「一榮」と表記）、娘・政子（同「麻紗子」と表記）との書簡から追ってみよう。

1949年11月25日から、川端は、広島県、広島市、中国新聞の招きにより、日本ペンクラブを代表して、原爆の被災地を訪問した。柊家に滞在したのは12月上旬から中旬にかけての約2週間である。この時、本能寺と嵯峨嵐山で、以前から興味を持っていた江戸時代の文人画家、浦上玉堂（1745-1820）について調べている。

机に向かうことも多く、妻の秀子宛書簡12月9日付には、「改造の方を一服し、文學界の方に今夜からとりかゝる。頭切り變へるのに少し面倒」、「昨夜から文學界書いて居る。さう早くハ無いが頭はよい。かぶさつてゐた暗いもの取れたやうだ」、「文學界明後日朝送る」との記載がある。さらに、12月13日付書簡では、「一週間に七十枚近く書き、煙草十箱のんだ。まだ書きたく書いて居る。文學界は三分の一ほど、改造ハ半分ほど、兩方とも尻切れ、續いてまとめたいが、もう歸る」と記されている。柊家での長逗留では、「天授の子」（『文學界』）と「山の音」（『改造』）を執筆していたとみられる。

妻や娘に宛てた書簡からは、川端の執筆活動を見守る柊家の人々の様子がうかがえ、川端の八重に対するきめ細やかな気遣いも感じられる。

「ひっそり座りこんで居るので宿でしきりと同情心配し、薄茶をくれたり菓子をくれたり、慰問度々だ。用を言ひつけないと心配する。こちららは頭せいせいして、肩もこらない。お八重さんに果物の見舞あげたら、その禮がまたていねい」(12月9日付)

「お八重さんも盲腸、まだよくならない」(12月13日付)

「宿ではよく氣張ってゐるので、宿中の人が同情し、いろいろサアビスしてくれる。廣島で感動して、精神が活動し出した」(12月15日付)

1950(昭和25)年は4月13日から、日本ペンクラブの代表19名とともに、長崎と広島を訪問した。その後、川端は、島原、雲仙、熊本、別府を回った後、4月25日から5月13日まで京都、柊家に滞在している。

川端はこの時、浦上玉堂の「凍雲篩雪」(のちに国宝)を入手した。高台寺の古美術商、薮本宗四郎を訪ねると、思いがけず玉堂の「凍雲篩雪」があり、翌日、薮本が柊家に絵を持参した。川端は、30万円と聞いて、秀子に駿河銀行(現・スルガ銀行)から20万円借りるように手紙で依頼している。最終的に27万円で折り合い、秀子宛書簡には、「婦人生活持参の五萬圓に、文藝春秋から貰つてあつたの加へて、全額支拂つた」とある。

このころの川端は、亀岡まで丹波焼の素焼きを見に行くなど、古美術に強い関心を示しており、「発表版」は、「座右寶の後藤眞太郎さんが年の半ばをこの宿で暮らしてゐて、ゆきあへると美術品にめぐりあふ幸せがある」との一文で終わる。ちなみに、1926(大正15)年に作家・志賀直哉が美術写真集刊行のために創設したのが座右寶刊行會で、それを引き継いだ後藤眞太郎は、戦後の1946(昭和21)年に美術雑誌「座右寶」を創刊した(19号で廃刊)。

#### 1940年代から1950年代にかけて定宿として利用

このように、川端は柊家に宿泊した6回について述べているが、実際ははるかに多い。例えば、「発表版」には一切の記載がない1943(昭和18)年と1944(昭和19)年にも、柊家に複数回、宿泊

している。

川端は1943年3月に、母方の従兄、黒田秀孝の三女政子を養女として引き取るため、高槻の富江(秀孝の元妻で政子の母)宅を訪問した。この時、柊家に泊まっている。『川端康成詳細年譜』は、3月18日に「淀野夫婦と華子が柊家へ来て、ちもとで会食。秀子も」と記す。

さらに翌4月、川端は『満州日日新聞』の「東海道」連載のため京都に向かい、柊家に滞在した。柊家から政子に宛てた書簡が残る。

1944年10月には、柊家を拠点に、吹田駅の機関車を調査している。「お八重さんは肺炎で死にかゝつたさうだが今は元気」(10月21日付)、「柊屋(ママ)米を出さぬと軽く二杯づつ。配給です」(同)、「昨日今日吹田へ行つた。捗らぬ。先方もいそがしい。吹田驛前に宿一軒、茨木もやはり驛前に一軒、茨木の方に驛の紹介で行つたが到底泊れぬ家だ。結局柊屋(ママ)から通ふ事にした。それがやはり一番よい。一合の辨當を持つて」(10月25日付)といった手紙を秀子に送っている。

「発表版」が書かれた1950年以降も、京都訪問時の定宿は長きにわたって柊家であった。その主なものを列挙しておく。

#### 1951(昭和26)年

7月と11月に京都に来ており、少なくとも、7月は柊家に宿泊した。柊家から秀子に宛てた書簡(7月27日付)があり、修学院離宮を訪問したことなどが記載されている。

#### 1952(昭和27)年

京都滞在は10月と11月の2回で、文芸春秋30周年記念近畿地方講演会で来阪した10月は、柊家に宿泊したことが確認できる。急ぎの原稿を書いていたとみられ、この時の秀子宛書簡(10月18日付)には、原稿と柊家に関する記述が目立つ。

「十八日夜三時。婦人畫報、三十五枚で終つた」  
「京都に夕方着いてみると、電話電報多く、自家のやうだ」

「朝、高田さんが着き、婦人公論二責められる。まだ手をつけて居ない。岩波文庫の横光のあとがきハ嵜から送つた」

「柊屋（ママ）、先日悪い部屋だったんで、今日は一番よい部屋を取つておいてくれた」

#### 1953（昭和28）年

川端は、淡交社が企画した美術史学者の小林太市郎（1901-1963）との対談会に参加するため京都へ。対談翌日には銀閣寺を訪問し、祇園の呉服店・ゑり萬で秀子のために羽織を買ったことなどが、柊家から秀子・政子に送った書簡（11月17日付）からわかる。

この年は角川書店の講演旅行で九州に出かけた帰りの6月20日にも京都で1泊しているが、宿泊先が柊家かどうかは明らかでない。

#### 1954（昭和29）年

7月下旬、京都で柊家に2泊し、広島に移動している。柊家から秀子・政子に宛てた書簡（7月28日付）には、「新聞があるので、今日書いて、明日ともの浦へ行く」とある。「宿の人みな顔が變つて、太つたといふ」と柊家の人々との懇意な関係も垣間見える。

#### 1955（昭和30）年

10月と11月に京都を訪ねている。10月の秀子宛ての書簡（7日付）は、左京区下鴨泉川三五からで、後に「古都」を執筆する武市龍雄邸に滞在している。11月の宿泊先は不明である。

#### 1956（昭和31）年

『川端康成詳細年譜』には、川端の京都滞在に関する記述がない。

#### 1957（昭和32）年

この年は少なくとも4回、京都に滞在している。国際ペンクラブ主催の第29回大会が9月2日から8日にかけて、東京と京都で開催されたためである。日本ペンクラブ会長の川端は、閉会式を京都で行う下準備で7月末から8月上旬にかけて来阪し、大阪商工会議所会頭や裏千家らに協力を仰いだ。この時、柊家に滞在した。

2回目は9月8日の閉会式に参加するため、ペンクラブ一行は7日から8日にかけて京都を滞在

した。閉会式は嵯峨野の天竜寺で行われた。一行は、都ホテル、京都ホテル、柊家、俵屋に分かれて宿泊したが、川端の宿は祇園八坂の塔の下にある安西だった。

3回目は、11月中旬である。川端は1951年頃から、鷹峯の光悦寺で開催される茶会「光悦会」にほぼ毎年のように参加しており、この年も11月11日に秀子とともに入洛した。ただ、この時の宿は、柊家ではない。「八坂の塔の下、安西に泊る。新築の離れ」（『「光悦会」入洛の数日をたのしむ』『それいゆ』、1957年12月）とある。

最後は、年末から年始にかけてで、川端は一人で京都を訪れた。30日に嵐山、嵯峨、清滝、苔寺を回り、31日には木屋町にあるバー「おそめ」で、京都の老舗漆器屋の主人・初瀬川松太郎に会い、バーのマダム・上羽秀と3人で知恩院そばの鐘隣閣で除夜の鐘を聞いた。この時は都ホテルに泊まっている（『京都行・湯澤行』1958年1月、「古都など」1960年1月）。

#### 1958（昭和33）年

京都を訪ねた形跡はない。ちなみに、川端は、1958年11月から翌年2月にかけて、胆石（胆嚢炎）のため東大病院に入院している。

#### 1959（昭和34）年

川端は、『婦人公論』、『中央公論』の編集部長などを歴任し評論家でもある藤田圭雄（1905-1999）の誘いを受け、藤田夫妻と秀子、政子の5人で、11月に関西旅行を楽しんだ。藤田によると、この時は、柊家が満杯で炭屋に泊まっている（『日記の中の川端さん』『川端文学への視界』、1985年）。

川端は12月にも2度、京都を訪ねている。京都を舞台にした小説を書くため、京都での住居を探していた時期にあたる。住まい探しを手伝った藤田の回想録「日記のなかの川端さん」に、当時の状況が詳細に記載されている。

六日八時半に末次攝子さんが訪ねて来る。わたしたちは川端さんに定家や実隆が出てくる小説を書いて頂くため、いつでも気の向いた時京都へ来られるようにしたいと画策していた。当

時の京都には、大きなホテルは都ホテルと京都ホテル位しかなく、そのホテルも現在の三分の一位の規模だった。柊屋（ママ）や炭屋もいつも一杯だし、林芙美子さんの定宿の其中なども部屋数は少いし、いつでも泊まれるというわけには行かなかった。そこで、中央公論社の嘱託である末次さんに部屋探しをたのんでいた。

川端は12月4日から7日まで、柊家を拠点に、藤田、末次のアテンドで下鴨の井上邸を見に行くが、結局、決まらず、12日に京都を再訪している。13日に、藤田、末次と同じ下鴨にある武市龍雄邸を見に行き、離れの二間を借りることになった。そして、この部屋で、京都を舞台にした本格的な長編小説『古都』と『美しさと哀しみと』が生まれたのである。ちなみに、この武市邸のすぐ南に、谷崎潤一郎が約7年にわたって住んだ「潺湲（せんかん）亭」（現・石村（せきそん）亭）がある。

川端は、そのまま柊家に逗留し、15日に伊賀に向かう。横光利一碑の除幕式に参加するため、横光については、川端自身が書いた随筆「横光利一文學碑」が詳しい。

1960（昭和35）年以降、川端が秀子や政子に宛てた書簡の住所は、「下鴨泉川武市龍雄様方」となった。

### 1960年、下鴨の仕事部屋へ

このように、川端は第二次世界大戦を挟みながら、約20年にわたり、好んで柊家に逗留した。下鴨泉川の武市邸を新たな拠点にする際も、川端と柊家の双方が、互いを思いやっての決断だったとみられる。仲居・八重は、『おこしやす』で次のように振り返っている。

この「古都」を執筆するにあたって、最初は柊家でお書きになりたいというお話があったのです。馴れてもいるし、先生としては、ほとんど決定したいお気持ちだったようですが、どたん場で中止になりました。

それは、お泊まりいただいても、長期間の滞在になるため、他のお客さまに気兼ねをされて、窮屈な思いをおかけしては先生に申し訳ない、

執筆に差し障りがあったてはいけないと、考えたのでした。

先生も、何日間も泊まり続けて部屋を占領しては、ほかの常連さんのお客さまを断らなければならない破目になるやもしれない。それでは、柊家に迷惑をかけることになる、と思いになれたようでした。

『古都』は、朝日新聞に1961年10月8日から1962年1月27日まで連載された。八重は、川端が仕事を下鴨に移してから支援し続けた。

ここに移られて、新聞連載を開催されたのでした。百七回というのは、一年の三分の一はかかるわけです。準備の期間なども当然必要でしょうから、ずいぶんと長い間、気を張って仕事をお続けになるのだと、尊敬が半分、心配が半分の気持ちで、お仕事に出発されるのをお見送りしました。

いちばんの心配は、柊家にお泊まりいただいてお世話できなかったことです。これは、とても大きな心残りでした。

下鴨神社の近くに移られたからといって、そのまま何もお手伝いせずには、どうしてもいられません。

私にできることはないかと考えたあげく、お料理をお届けすることにしたのです。

お泊まりいただいている時に、よく召し上がる好物を板前さんに特別に作ってもらい、それをお届けに行ったものでした。

時には、私の手料理を添えたことがありました。たまには、田舎の味も趣があつていいのではないかと思ったのです。おいしそうに召し上がっていただき、とても嬉しかったことを覚えています。

柊家は、あの名作『古都』が生まれた宿とはならなかったが、八重らが川端の執筆活動を陰で支えた。

八重はまた、川端が自身を追い込んで小説を書いていたことを連載終了後に知った。「どれほどに辛く、苦しいことであつたかと思うと、いまで

も心が痛みます」と述べ、「その時に、私が先生の苦しさを知ったからといって、なにかのお力になることができるというものではありません。ただ、そのことに少しも気づかなかった自分の至らなさ、仲居としての未熟さに我慢がならなかったのです」とその胸の内を吐露している。

川端が下鴨の「仕事部屋」に移ってからも、八重は、川端の思いをくみ取り、さりげなくもてなす仲居であり続けようとした。

### 川端はなぜ柊家に惹かれたのか

柊家の魅力については、「発表版」の後に書かれた「未発表版」が詳しい。川端がまず挙げるのが、「目立たないこと」と「変わらないこと」である。「柊」のマークや調度品を例に、控えめで優雅なたたずまいを褒め讃える。

柊の様子は夜具やゆかたばかりではなく、湯呑や飯茶碗などの瀬戸物にも、みだれ箱や屑入れなどにもついてゐるのだが、その柊は目立たない。またそれらの調度は、十年、二十年、戦時も戦後も変らない。ずいぶん多く用意してあったとみえる。この目立たないことと、変わらないこととは、古い都の柊家のいいところだ。昔から格はあっても、もののしくはなかった。戦後の風にも染まない。

また、川端が求めたのは安心して落ち着ける宿である。ぜいたくな宿でも趣向を凝らした宿でもない。そして、川端は、柊家で心の安寧が得られるのは、柊家の控えめな家風のおかげだと指摘する。川端は、なつかしい日本を体感できる空間、とりわけ、その静けさに魅了されたようである。

柊家は京都の代表の立場からも、戦後戦時の闇は一切しなかった。最も不自由な時は、女中さんが配給の菓子を私たちに分けてくれ、奥さんが家庭配給の肉を煮て私たちに分けてくれるといふ風だった。私が柊家に着いて安心するといふのは、なじみの宿のせりばかりではない。柊家の家風のせりである。

料亭のやうにぜいたくな宿、みせかけの数寄

の宿、押しつけがましい宿、うるさい宿、風儀の悪い宿は、全国的に萬りつつあるが、安心して落ち着ける宿は、どこでも稀になって来た。京都は昔から宿屋が良くて、旅客を親しく落ちつかせたものだが、それも変わりつつある。柊家の萬事控目が珍しく思へるほどだ。京のしぐれのころ、また梅雨どきにも、柊家に座って雨を見たり聞いたりしてゐると、なつかしい日本の静けさがある。

もちろん、何度も宿泊し、勝手を知るとなると、宿泊者の緊張感は消える。また、おもてなしの心をもった宿であれば、宿泊者の嗜好や行動様式を熟知し、痒い所に手が届くようなサービスを提供してくれるようになるだろう。さらに、何度も泊まることで、宿は、幾多の思い出が詰まったかけがいのない場所となる。記憶がよみがえるなつかしい場所に戻りたくなる側面も否定できない。

私の家内なども柊家の清潔な檜の木目の湯船をよくなつかしがる。私は旅が好きだし、宿屋で書きものをする習はしだが、柊家ほど思い出の多い宿はない。京の名所や古美術なども、この宿を根にして見歩いた。浦上玉堂の「凍雲飾雪」を入手したのも、この宿でめぐりあってだ。宗達、大観などもこの宿で荷造りして持ち歸った。旅の道づれとしてこの宿に來た人たちで、久米正雄氏、横光利一氏、片岡鐵兵氏、林芙美子氏などもう今はゐない。

このように、川端が柊家を愛した理由はいくつも挙げられるが、川端にとって柊家は、愛おしい「古都」の象徴であり、自分の家に帰りついた時のようなくつろぎを感じられる場であった。京都に惹かれ、京都を舞台にした多くの小説を世に送り出した川端は、戦後失われつつあった「京都らしさ」を柊家に見出していたのかもしれない。

政治家や財界人ばかりではなく、書家や學者や文學者にも昔から親しまれた宿として、柊家は古都の一つの象徴であらう。

私は京阪のほかの宿で泊まった後でも柊家へ落ちつきにゆき、中國、九州の旅の行帰りにも柊家に寄って休む。玄関に入ると「来者如帰」の額が目につくが、私にはさうである。

## 川端にとっての京都とは

では、川端にとって、京都とは何だったのだろうか。京都を主要な舞台の一つとする最初の長編小説『虹いくたび』は、『婦人公論』に1950（昭和25）年3月号から1951（昭和26）年4月号まで、14回にわたって連載された。さらにその翌年、1952（昭和27）年1月から1953（昭和28）年5月にかけて、同じ「婦人公論」で京都が舞台の『日も月も』が連載されている。

そして、その約8年後の1961（昭和36）年、京都を舞台とする『古都』と『美しさと哀しみと』の連載がスタートした。先に見たように、この間、川端はほぼ毎年、京都を訪れた。

このように、川端は京都を深く愛した文豪の一人だが、彼の京都への関心は若いころに芽生えたようだ。中学時代、川端は寄宿舎を抜け出して、夜の京都を一人でさまよった経験がある（「大女優の異常」1952年8月）。31歳の時に記した「嵯峨と淀川堤」（1931年3月）では、京都を「古典的な郊外」と評し、そこに「静かな寂び」や「古い文化の美しさ」を見ている。

東京から行つてみると、京都は古典的な都會であるよりも、古典的な郊外であると感じられる。四條通の繁華のなかから、ふと目を上げて東山の新緑を見た時は、これが都會であるかと驚く。祇園の舞妓も、あれはもう今の世の郊外の美しさである。京都市は郊外といふものの古典的な理想である。従つてまた、京都の郊外は美しいところが多い。

とりわけ嵯峨の静かな寂びが私は最も好きである。祇王寺のなかなぞは、静けさの音が降つてゐる。その寺から嵐山のほととぎす亭へ出る裏道がいい。深山の静かさとは全くちがつた静かさである。ものなつかしく、艶めかしく、それでゐて、古い日本の佛の匂ひのする静かさで

ある。東京や大阪の田舎の村の女を眺めた目で、嵯峨の女を見ると、古い文化の美しさといったやうなものが感じられる。

こうした京都への関心が本格化するのは第二次世界大戦後である。川端が戦後の京都に初めて触れたのは1949年11月、日本ペンクラブの代表として広島の実験被爆地を訪問した帰途であった。川端はその翌年にも、原爆の被災地を訪ね、京都に立ち寄った。この時の思いを川端は「獨影自命」（第16巻本『川端康成全集』（1948年5月-1954年4月刊）の各巻に付されたあとがきをまとめたもの）で、次のように記している。

去年の十一月に広島へ行つた歸りも、私はやはり十二月の二十日ごろまで京都にとどまつて、浦上玉堂の墓や碑を見に行つたり、古美術を見歩いたりしてゐた。広島の実験被爆地の惨害のあとを見聞きたる歸りに、古都の風光や古美術を見るのは、矛盾した自分であらうかと、去年の暮に思つてみたものだが、今年の春も思つてみた。しかし矛盾してゐるとは思へないし、やはり一人の私である。広島と京都とは今日の日本の両極端かもしれないし、そのやうな二つのものを私が同時に見てゐるわけであらうが、二つともなおよく見たいものである。古美術を見るのが、趣味とか道楽とかでないのは言ふまでもない。切實な生命である。（1950年5月）

広島・長崎で、戦争の惨さ、無残さを目の当たりにした川端は、ほぼ無傷で残った京都のたたずまいや景色に胸を打たれた。さらに、国際ペンクラブの仕事で、海外に出向くことが増えたためだろう。日本固有の美や文化に対する関心が高まり、戦後、急速に変わる京都を外国の古都と比較して語るようになった。

京都の新しい家と暮らしに「京人はみやびに今めかしけれ。」（源氏物語）と、強ひられはしないのだが、それはおのづから今にも傳はり残つて、千年間に度重なる戦災、天災、人災、また生活の推移で、京もずるづる變つてきてゐて

も、やはり日本に一つの古都で、日本のふるさとである。京都市もそのことをつとめてだいにしてゐるやうだ。しかし、たとへばロオマやパリには及ばないし、心も力も足りない。京都を世界の寶として、今よりさらに外國からの観光客が群れ満ちるころ、京都の町は京都らしさを損じ、あるひは失つてはゐないだらうか。高層建築で山が見えなくなるのも、店や家が洋館まがひになるのも、今日の必要便利でふせげまいが、その洋風がちやちでみつともないのも、私有の地に私有の金で私有の家を建てるのだから仕方がない。「秋はタぐれ。夕日花やかにさして、山の端いと近うなりたるに……。」（枕草子）の夕日は變らなくても、山の木はなくなり、山は削りくづされて分譲地になつてしまはないか。自然の美の尊びも、町づくりの美も踏みやぶつてゆく、今の日本人はすさまじい勢ひ、おそろしい力である」（「町づくり」1952年8月）

川端は、京都を「日本に一つの古都」であり、「日本のふるさと」であると称し、その変貌に驚愕し、諦めの念さえ抱き始めているのである。1960年1月に発表した「古都など」でも、「京都の町のひどく變つてゐるのにおどろいた。古都としての京都の町はやがて壊されてなくなつてしまふ、戦後のつまらぬ地方都會のやうになつてしまふと、私は京都の人にもいつた」と述べ、消えゆく京都の美しさや特質に強い哀惜を示している。そして、「京都を見て、なにか書ければよいが、強いて書くつもりはない。その書くものが小説にならなくてもかまはない」、「私は京都の古い町などを勝手に歩いてゐたい」とまで言う。

川端と京都の関係に着目し『川端康成——内なる京都』（京都新聞、1995年）を刊行した河野仁昭は、「京都の京都らしさ」、あるいは「日本の『ふるさと』をたずねるような小説」が『古都』のねらいであつたと分析する。

川端の「『古都』を書き終へて」にも、京都を京都たらしめている町なみや伝統文化、人などの消失に対する深い悲しみとそれを記しておきたいとの想いが切々と述べられている。

とにかく、私たちが若いころの京都は日に失はれてゆくのではないかとうれへる。町の中心の住宅街を歩くと、京都らしい面影を見る。いや、まだまだ多くの京都はある。さがさなくても、いくらかもある。東山、西山、北山や加茂川もある。しかし、ロオマやパリなど、ヨオロッパの古い都を、今のうちによく考へておく必要がある。祇園の京舞その他の藝や催しものばかりではなく……。

しかし、なにしろ千年の都（その間には町も焼け、所も多少移りはしたが。）であつたのだから、古社寺、名所舊跡、藝事、行事などは別としても、古都のふんゐきは、まだ保たれるであらう。おそらく人の心、暮しも、多少はさうであらう。たとへば菓子屋などでも、注文を受けただけしかつくらない店がある。（絶対に京都だけとは限らぬかもしれぬが。）名人氣質でものをつくつてゐる人が少くない。私の「古都」は、さういふ人を書いてみたい氣もあつた。（1962年1月）

川端の日本固有の美や文化に対する関心は、1968年のノーベル文学賞受賞式での講演からもうかがえる。そのタイトルは「美しい日本の私」である。河野は、「自らの文学が日本独自の文化に根差すものであることを、川端はアピールし、理解してもらおうとしたのである」と説明する。そして、美しい日本の象徴である京都は、川端のふるさととなった。

京都は日本のふるさとだが、私のふるさとでもある。私の村は現在茨木市にはいつてゐる、京都と大阪との中間の山裾の農村で、その山を深くはいれば丹波である。村の景色に藝はないけれども、近くに「伊勢物語」や「徒然草」に書かれた所がある。藤原鎌足の遺蹟も隣り村にある。私の村もふくめた関西の自然の中核、象徴は京の山河で、私が京都の山河をふるさととするわけである。今は新幹線のひかりで沿線を味はふゆとりもないが、むかしは東京からの汽車が近江路にはいると、ああ、ふるさとに歸つた、日本に帰つたと、肌身になつかしさのよ

こびがしみじみとしたものであった。私は京の王朝の文學を「搖籃」としたとともに、京の自然のこまやかさを「搖籃」として育ったのであった。（「茨木市で」1968年12月）

こうした川端の発言を踏まえ、河野は、次のように結論づけている。

日本文化のふるさとである京都を、川端はみずからのふるさととしてなつかしみいつくしんで来たのである。そのふるさこそまさに「美しい日本」にはかならなかった。そして、そこが自らのふるさとでもあるかぎり、彼自身の外にある「美」の世界ではありえなかった。彼は自らの内部に実在する「古都」を見つづけているように思われる。（269頁）

川端は、柊家に逗留し、京都を散策し、美しい日本が何たるかを思索した。また、柊家での人々との出会いや交流が、川端の心を和ませた。川端は、1899（明治32）年6月、大阪市内で医者の子として生を受けたが、1901年に父、1902年に母と死別し、茨木にある父の実家に引き取られた。祖父母に育てられていたが、1906年に祖母が、1909年に姉がなくなり、さらに1914（大正3）年、唯一の肉親だった祖父もこの世を去った。茨木中学校（現・大阪府立茨木高等学校）に通っていた川端は、祖父の死後、寄宿舎で暮らし、卒業後は東京の第一高等学校（現・東京大学教養学部）に進学した。実家のない川端にとって、柊家は、古都の一つの象徴であるだけでなく、心置きなくくつろげるふるさとであったに違いない。

川端は、京都に足繁く通い始めた40代前半から50代後半まで、約20年にわたって、柊家を愛し定宿とした。だが、京都を舞台にした作品を執筆をするため下鴨泉川の武市邸に居を構えたのを機に、柊家との関係は薄れたようだ。川端は生涯にわたりほぼ毎年京都を訪れたが、60代前半は武市邸、60代後半以降は都ホテルが主な滞在先であった。1972年4月にガス自殺したため（享年72歳）、1971年の大晦日から1972年の年明けにかけてが最後の京都訪問となった。

- 1) 四条烏丸の交差点を中心に、御池通（北端）、五条通（南端）、河原町通（東端）、堀川通（西端）に囲まれた約2平方キロメートルのエリア。
- 2) 佐藤年『俵屋相伝——受け継がれしもの』、世界文化社、2012年による。
- 3) 東京生まれ。戦後アメリカに渡り、フォト・ジャーナリストとして、『ナショナル・ジオグラフィック』、『ライフ』、『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』などで活躍した。1962年に日本に拠点を移し、京都定住後は京都市立芸術大学で教鞭を執った。
- 4) 大野正人「古代から近世における宿泊施設と宿泊業の発達過程の研究」『横浜商大論集』2020年、53巻2号、19-50
- 5) 川端康成と京都の関係に関する年譜は、茨木市立川端康成文学館編集・発行の冊子「古都をかける川端康成」（川端康成没後50年特別企画展）を参照されたい。本稿作成にあたっては、柊家旅館の方々にもご協力いただいた。謹んで感謝申し上げる。
- 6) デジスタイル京都、<http://www.digistyle-kyoto.com/gourmet/ajinamise/tominoi/tominoi.htm>（2024年3月20日閲覧）